

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12797

研究課題名（和文）野生概念の再考と意義：現代フランス思想における存在論的転回

研究課題名（英文）Rethinking the Concept of Wildness

研究代表者

小林 徹（Kobayashi, Toru）

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：70821891

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：現代人類学における存在論的転回は、世界を把握するという人間の基本的な営みに関する考え方に根本的な変更を促し、現代哲学に大きな問いかけを残している。本研究では、クロード・レヴィ＝ストロースの構造人類学とモーリス・メルロ＝ポンティの現象学的思考との思想史的な交叉に立ち返り、この革新的動向の哲学的意義および実践的射程を探った。彼らがそれぞれの仕方でも提示した「野生」の概念は、構造概念をめぐる従来の考え方の再構築を促し、現代における人間性の捉え方や、人間科学と哲学的思考の関係の在り方について新たな展望を切り開くものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代人類学における存在論的転回については、すでにさまざまな議論が行われ、検証が続けられているが、本研究は、領域横断的な思想史的観点からこの問題にアプローチし、モーリス・メルロ＝ポンティとクロード・レヴィ＝ストロースにおける「野生」の概念を再検討する作業を通じて、この動向の哲学的意義と実践的射程を明らかにした。特に両者が提示している構造概念の含意を掘り下げ、その今日的な意義を探ることによって、新型コロナウイルスのパンデミックに直面している現下の状況の中で、人間性についての理解を深め、人間諸科学がもたらす諸成果を踏まえつつ思考する道を具体的に示した。

研究成果の概要（英文）：The Ontological Turn in contemporary anthropology causes radical changes in our thoughts on the fundamental human comprehension of the world and poses a great question for contemporary philosophy. This research project returns to the historical crossing of Claude Levi-Strauss' structural anthropology and Maurice Merleau-Ponty's phenomenology to investigate the philosophical significance and practical implications of this revolutionary movement. The concept of "Wildness," which they both presented in their ways, urges us to reconstruct the conventional notion of "Structure" and open up a new perspective to the theory of humanity and the relationship between human sciences and philosophical thought in our time.

研究分野：現代哲学

キーワード：構造人類学 野生 存在論

1. 研究開始当初の背景

(1) 領土の外部に赴き、他文化との交流の中で自文化の中心性を懐疑しつつ、人間性そのものを理解しようとする人類学の営みは、これまで民族誌を通じてさまざまな世界観を報告してきたが、二一世紀に入り、同一世界についての解釈の複数性ではなく、事物の存在そのものの多様性を捉えようとする多自然主義の登場と共に、いわゆる「存在論的転回」を果たすに至った。この潮流は、現代人類学において、さらに批判的な仕方で受け継がれ、科学技術社会論やケアの倫理学とも交叉しつつ、マルチスピーシーズ人類学などさまざまな方向に接続されている。しかしながら、そもそも二〇世紀のフランスにおいて支配的であった哲学的立場との鋭い緊張関係の中から生み出されてきた構造人類学を源流とするこの革新的動向については、その思想的意義を哲学的文脈において理解することが喫緊の課題として残されたままである。現在、いわゆるポスト構造主義的観点から人類学と哲学の交錯状況を把握しようとする試みも散見されるが、観察者の認識論的な枠組みを解体しつつ、現地民が語る世界の様子を聴き取ろうとする存在論的転回の姿勢は、世界を構成する諸事物の現出に遡ろうとする現象学的努力とも深く響き合っている。本研究は、現代人類学を代表するフィリップ・デスコラに対する現象学者モーリス・メルロ＝ポンティの影響を追跡することを通じて、この現代的潮流の哲学的意義を解明するものである。

(2) 研究代表者は、二〇一九年度から科学研究費助成事業(研究スタート支援)を受け、経験的領野の構築の起点となる「身体」の捉え方に着目しつつ、フィリップ・デスコラ思想研究を開始した。デスコラに関しては、特に二〇〇五年に出版された『自然と文化を越えて』(拙訳、水声社、二〇二〇年)の歴史的意義については評価が確立している。自然と文化を断絶させる近代的な二分法的枠組みを越えて、師であるクロード・レヴィ＝ストロースを踏襲する形でカント以来の図式論を粘り強く再構築しようとするその方法論は、現代における身体論の在り方を鮮やかに提示している。そこには膨大な人類学的知見に加えて、昨今の認知科学等の諸成果が積極的に取り込まれており、さまざまな民族における世界認識の在り方が四つの存在論として総合的な仕方で展開されている。しかしながら、こうしたデスコラの方向性に対しては、すでに同世代のエドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロやティム・インゴルド、そして後続世代のフレデリック・ケックらを含めて、より革新的な指針を追求する思想家たちから諸々の限界も指摘されている。そこで本研究では、デスコラが自身への影響を認めるレヴィ＝ストロースの構造人類学とモーリス・メルロ＝ポンティの現象学的身体論の歴史的交叉に着目することによって、改めて彼の方法論の可能性を探りながら、現代人類学における存在論的転回の哲学的意義を解明することを目指した。構造概念をめぐるのは、レヴィ＝ストロースとメルロ＝ポンティは必ずしも意見が一致しているわけではないが、見方を変えれば、このすれ違いは、この概念の重層的な複雑さを物語っているとも言える。哲学的観点から考えるならば、構造概念の複雑さは、そのまま構造が芽生える場としての「野生」の概念の複雑さに反映されている。あらゆる言説に先立つ「野生」を問題にすると、私たちはいかなる言説にも従属することのない場に立とうとしていることになる。レヴィ＝ストロースとメルロ＝ポンティの交点に位置づけられるデスコラ思想は、人類学という学問領域の強化であるというよりは、領域横断的な仕方で知性や人間性について考えるための新たな方法を模索する試みとして受け取ることでできるものである。

2. 研究の目的

(1) 以上の背景状況から、本研究の目的は、第一に、現代人類学における存在論的転回の哲学的意義を確認するために、その思想的背景を、モーリス・メルロ＝ポンティとクロード・レヴィ＝ストロースの思想的交流に遡って理解することである。同時代の思想家であるにもかかわらず、メルロ＝ポンティには人間諸科学全般に対して哲学的言説の自律性を擁護する傾向があり、レヴィ＝ストロースには現象学的研究に対して抽象的システムの働きを科学的な研究対象とする姿勢が顕著であるため、両者の思想的交流の内実については、これまで敵対的な側面が強調されてきたと言える。しかしながら、前者は晩年に至っても構造人類学の動向に目配せしていたし、後者も互いの思想的立場を重ね合わせて理解しようとしていた。フィリップ・デスコラ思想は、現代人類学における存在論的転回の一翼を担うと共に、二〇世紀を席卷した諸々の思想的流行が過ぎ去った後に、あらためてメルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロースの交流の内実を問い直す契機となっている。

(2) 本研究の第二の目的は、構造人類学を継承するデスコラやヴィヴェイロス・デ・カストロらの議論を追跡することにより、構造概念の今日的意義を検討することである。二〇世紀の思想において構造概念がもたらした革新には異論の余地はないが、この概念は、レヴィ＝ストロースが提示して以来、幾多の批判に晒されてきており、未だに確定的な意義が認められているとはいえない。本研究では、この問題に、レヴィ＝ストロースと同時代にメルロ＝ポンティが提示し

ていた独自の構造概念を対照させることによって取り組んだ。メルロ＝ポンティの発想は、身体と環境が取り結ぶ関係性から、現象的領野を離脱せずに社会全体を織りなす構造を把握しようとするものであったが、『野生の思考』以来のレヴィ＝ストロースも、現象学的方法論とは相容れない形であるとはいえ、ある意味ではこの生態学的な構造概念を目差しながら、自らの構造概念を掘り下げ続けていたと言える。このように考えるならば、デスコラの『自然と文化を越えて』は、レヴィ＝ストロースの営みを批判的に継承しつつ、メルロ＝ポンティ的な構造概念が孕んでいる今日的な可能性を極限まで追求した試みだったと言える。また、新型コロナウイルスをめぐるフレデリック・ケックの民族誌的研究は、いわば実践的な側面からデスコラの探究を照らし出すものとして解釈することができる。

(3) 本研究の第三の目的は、メルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロースが、独自の構造概念を模索する中で直面し続けた「野生」の問題を顕在化させ、最終的にはこれを今日の哲学的・人類学的思考にとって欠かすことのできない領域横断的概念として提示することである。メルロ＝ポンティが晩年に問われるべき謎として残した「野生の存在論」は、デカルト以来の存在論を問い直すという哲学的課題であると同時に、人類学を含む人間諸科学全般を視野に入れた問題領域としても構想されていた。本研究は、これをレヴィ＝ストロースにおける「野生の思考」との関係や、現代人類学における存在論的転回の文脈の中で問い直すことによって、現代人類学における「野生」の概念の哲学的意義を照らし出すことを目指すものである。それは同時に、メルロ＝ポンティ自身が提示した「野生」概念の観点から、彼が探究していた制度論あるいは言語論の可能性を改めて吟味することでもあり、最終的には、今日的な状況下における人間諸科学に対する哲学的言説の位置づけを再考することにも繋がっている。

3. 研究の方法

本研究は、上記の三つの目的を視野に収めつつ、主として文献収集、文献読解、論文執筆の過程を経ることによって、(1)メルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロースの思想的交流に関する調査、(2)構造概念の同時代的射程に関する調査、(3)「野生」概念の意義に関する調査を同時並行的に追求した。また、哲学と人類学を跨ぐ領域横断的な研究であることを考慮し、学会発表やシンポジウムだけでなく、研究会やリサーチ・ミーティングを通じて、専門領域を異にする国内外の研究者らとの積極的に連携することを重視した。

4. 研究成果

(1) 初年次となる二〇二〇年度は、基礎的な文献の収集と読解に当てられた。デスコラ思想については、レヴィ＝ストロースの構造人類学とメルロ＝ポンティの現象学的身体論との関係という観点からアウトラインを描くことができた(〔学会発表〕「構造と存在の間に：フィリップ・デスコラの図式論」)。デスコラ思想と同時代の人類学者たちによる評価や批判については、『自然と文化を越えて』の合評会を契機として、特に「構造存在論」を標榜する彼の方法論的側面について発表し、人類学を実践するさまざまな研究者と意見を交わすことができた(〔学会発表〕「越える前に：デスコラの方法論に関するコメント」および「方法的欠如：デスコラ存在論?」)。また、フレデリック・ケックが提示している感染症に対する「備え」の概念について発表する機会を得て、哲学や人類学だけでなく、科学論・医学史・文学史を専門とする研究者と意見交換することができた(〔学会発表〕「危機への備え：現代人類学と感染症」)。

(2) 第二年次となる二〇二一年度には、メルロ＝ポンティと現代人類学の関係を整理すると共に(〔雑誌論文〕「野生を取り戻す：メルロ＝ポンティと現代人類学」)、メルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロースの思想的交流に焦点を絞って研究を進めた(〔学会発表〕「野生の顕現：メルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロース」)。特に後者においては、従来実存主義と構造主義というレッテルのもとに敵対的な立場として整理されることの多かった両者の思想を接近させ、メルロ＝ポンティと構造人類学の関係だけでなく、レヴィ＝ストロースの思想における存在論的側面を積極的に議論することができた。また、両者を横断する問題として、人間存在における象徴体制の制度化という契機が浮かび上がってきた。現代人類学における構造主義的思想の実践的な展開に関して、新型コロナ・パンデミックをめぐるケックの論考を訳出・解題する機会を得た(〔図書〕『いま言葉で息をするために』所収「アジアの虎たちと中国の龍 パンデミックに対する前哨地間の競合と協働(SARSからCOVID-19へ)」)。

(3) 最終年次となる二〇二二年度には、これまでの研究の総括として、次の二つの論文を刊行することができた。デスコラ思想を構造主義の継承という観点から論じた論文(〔図書〕『構造と自然』所収「生成する構造主義：フィリップ・デスコラと野生の問題」)においては、現代人類学に暗黙のうちに影響を与え続けているメルロ＝ポンティの「野生」の概念について議論をまとめた。また、メルロ＝ポンティにおける構造概念の重要性を主題とする論文(〔図書〕『あらわれを哲学する』所収「哲学は遅れて：メルロ＝ポンティと構造の問い」)においては、構造の概念化をめぐる哲学と人類学の取り組みを遅延という観点から捉え、人間諸科学に対する哲学的

言説の特異な自律性を明らかにした。さらに、レヴィ＝ストロースについて、近年公刊された構造言語学者ロマン・ヤーコブソンとの往復書簡の読解を行い、構造概念の歴史的な生成過程や同時代的な射程について調査した（本往復書簡については拙訳にて刊行予定）。また、哲学的言説の特異性という論点については、さらに広い文脈の中で問い直す必要があったため、メルロ＝ポンティの言語論を敷衍し、特に文学的言語との近接性と差異という観点を導入して論じることによって、今後の研究において象徴体制の制度化の問題に関する議論を深めていくための布石とした（〔雑誌論文〕「語らぬ言葉：メルロ＝ポンティを読むプランシヨ」）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林徹	4. 巻 37
2. 論文標題 語らぬ言葉：メルロ＝ポンティを読むブランシヨ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 龍谷哲学論集	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林徹	4. 巻 26
2. 論文標題 野生を取り戻す：メルロ＝ポンティと現代人類学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 メルロ＝ポンティ研究	6. 最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14937/merleaujp.26.73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 野生の顕現：メルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロース
3. 学会等名 メルロ＝ポンティ・サークル第28回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 野生を取り戻す：メルロ＝ポンティと現代人類学
3. 学会等名 日本メルロ＝ポンティ・サークル
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 構造 と 存在 の間に：フィリップ・デスコラの図式論
3. 学会等名 日仏哲学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 越える前に：デスコラの方法論に関するコメント
3. 学会等名 フィリップ・デスコラ『自然と文化を越えて』合評会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 方法的欠如：デスコラが存在論？
3. 学会等名 フィリップ・デスコラ『自然と文化を越えて』合評会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 危機への備え：現代人類学と感染症
3. 学会等名 慶応義塾大学文理連携プロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 荒畑 靖宏、吉川 孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 あらわれを哲学する：存在から政治まで	

1. 著者名 檜垣立哉、山崎吾郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 260
3. 書名 構造と自然：哲学と人類学の交錯	

1. 著者名 西山雄二	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 いま言葉で息をするために：ウイルス時代の人文知	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------